

1. 本学におけるPBLテュートリアル教育の学生評価法と今後の課題 第三報

テュートリアル委員会

松田隆子, 内田幸介, 小山徹也, 西山 緑,
千種雄一, 今村武佳, 柳田 修, 吉原重美,
本田幹彦, 田所 望, 金子 昇

【目的】 テュートリアル教育における評価法の標準化は極めて重要な問題である。今回、本学テュートリアル教育の本年度および3カ年の評価の推移の検討と今後の課題について報告する。

【対象・方法】 今までと同様に、対象はテュートリアル教育を受けた1～3学年で、評価はテューター評価（問題抽出能力, 自己学習能力, 説明能力, グループへの貢献度, 多名性, 統合性の6項目）、レポート評価, 出席点で行い、学生も自己評価させた。1年後期の得点を75点以上、未満の2群に分け評価点の推移を検討した。

【結果】 評価点の総合得点は3学年で高かった。今まで同様、高学年になるほど評価項目の平均点は高くなったが、説明能力, 多面性は他の項目に比べ低かった。また成績のよい学生は悪い学生に比べ自己評価を低く評価する傾向は同じであった。テューター間の評価点のばらつきは年毎に少なくなった。1学年で低得点の学生は3学年で改善する傾向が見られた。

【考察】 テュートリアル教育では高学年ほど評価得点が高くなった。テューター評価が低い学生ほど自己評価が高い。1年で低得点の学生はその後成績が向上する傾向がある。

2. ラット脳リゾホスホリパーゼDの精製と性質

生化学

杉本博之

【目的】 リゾホスファチジルコリン (LPC) より生理活性脂質リゾホスファチジン酸 (LPA) を生成するリゾホスホリパーゼDが血液中に存在し、Autotaxin (100kDa) と同一タンパクであることが報告された。我々はラット脳にも組織特異的リゾホスホリパーゼDが認められるか否か酵素精製を行った。

【方法】 ラット脳核画分のリゾホスホリパーゼDをCHAPSにより可溶化しDEAEなど種々のカラムを用い酵素を精製した。

【結果】 精製によりラット脳リゾホスホリパーゼDの単一の標品を得た。分子量は35 kDaであり、LPCばかりでなくPAFやリゾPAFも基質としLPAやアルキル-LPAを生成した。分子量や基質特異性より脳の組織中にはAutotaxinとは異なる新規リゾホスホリパーゼDが認められ、PAF代謝やシグナル伝達に関与することが示唆された。